

普通の教師が生きてる学校 モンスタース！ペアレント論を超えて

大阪大学名誉教授
小野田正利

「生き物係」が減った！

Point

- ①小学校では「生活」科の登場前後から飼育小屋が増えてきたが、近年になって、急速に姿を消しつつある
- ②子どもたちの、命の大切さや心の成長につながり、科学的な見方を養う上で、重要な学校飼育動物
- ③コロナ禍が落ち着いたら、動物飼育教育、動物介在教育の意義を再確認してみよう

学校飼育動物

折に触れて小学校を訪問すると、自分の小学生時代と比べて、いちべつして大きく変化したことが分かるのが、校庭にある遊具の減少と消滅である。死亡事故や重篤な事故が起きたことで、向かい合って座る箱形ブランコや雲梯が撤去され、安全基準の見直しによって、シーソーやジャングルジムもなくなっているところが多い。

校庭周辺でもう一つ見当たらなくなったのは、動物飼育小屋だ。1955年生まれの私の通った小学校には、飼育小屋はなかった。田舎というこ

ともあって、ニワトリは多くの家で飼って盆暮れに絞めて食用にしていたし、わざわざ学校で小動物を飼つてめどる必要がなかったからである。

2年前に亡くなった漫画家のさくらももこさんは、10歳下で、65年に静岡県清水市(現静岡市清水区)で生まれている。テレビアニメ「ちびまる子ちゃん」では「にわとりをつかまえろ」の巻(2014年8月17日放送)で、まる子がニワトリ小屋の掃除当番のときに、1羽のニワトリが逃げ出してしまつて、てんやわんやの様子が描かれていた。

3人ユニットの人気ミュージシャン、「いきものがかり」は、男性2人が1999年にアマチュアバンドを組み、直後に女性のボーカルが加わり、2006年にメジャーデビューを果たした。この名前の由来が、神奈川県海老名市の小学校1年生の時に、男児2人が、係活動で金魚に餌をあげる「生き物係」であつたことに由来していることは、あまりにも有名である。

今でも、メダカや金魚やカメなどを飼っている学校は多いが、それらは職員用玄関口の近くの、水槽の中に入れていることが多くなった。明

確な変化は、小動物を飼う飼育小屋がなくなつたこと、かつ、鳴き声を上げない動物ばかりになったということだ。

学校飼育動物をめぐるのは、昔から多くの苦情が寄せられてきたことも関係している。周辺住民からは「早朝からニワトリの鳴き声で迷惑している」、保護者からは「うちの子だけが餌やり当番の回数が多い」、さらには、動物愛護関係団体から「狭い小屋の中に多数の動物が押し込められ、劣悪な環境で育てられている」など。

「生活」科の登場で

若干語は変わるが、私が長崎大学で教え始めた頃「ニワトリを殺して食べる授業」という衝撃の本が出版された。東京都の小学校教師の鳥山敏子さんが著した「いのちに触れる」(太郎次郎社、1986年)である。鳥山さんはその後「ブタまるごと一頭食べる」(フレール館、87年)という教育実践も行っている。

2008年に公開された、妻夫木聡さんが主演で教師役となつた映画「ブタがいた教室」(前田哲監督、「ブタがいた教室」制作委員会)は、実話を基にしている。現在は、京都教育大学教授として数学を教えている黒田恭史さんが、新任教師として大阪府豊能町の小学校に勤務していた際、学生時代に読んだ鳥山さんの実践に惹かれたという。黒田さんの「豚のPちゃんと32人の小学生」の授業900日(ミネルヴァ書房、03年)では、育てて最後は食用にするという目的で飼いはじめた

ものの、世話をする子どもたちはブタがいとおしくなっていく。「ブタを食肉工場に送るか」「3年生に引き継いで飼ってもらうか」で、子どもたちの意見は分かれ、侃々諤々^{かんかんがく}の議論となっていく。

映画では描かれないが、餌代や成長に合わせて飼育小屋を大きくする必要があり、廃品回収をして費用を工面するなど、保護者たちも積極的にこの取り組みを後押ししている。この教育実践には、問題解決学習につながるという評価だけでなく、食用のための飼育動物と愛玩動物の飼育は異なるのではないかといった批判を含めて、賛否両論が交わされている。

さて、動物を学校で飼育するのは、明治時代末期から大正時代にかけて始まったといわれるが、その取り組みは、学校ごとによりまちまちであった。これに教育的意義を付与したのは、戦後の学習指導要領である。1947年の学習指導要領理科編(試案)には「生きものをかわいがり育てる態度」が目標として掲げられ、小学校1年生の理科指導は「単元1 動物の生活」から始まっている。58年改訂では1年生理科の目標に「学校や家庭などで育てている草花や動物の世話を手伝い、それらをかわいがることに喜びをもつようにする」とされていた。

多くの校庭に飼育小屋が設けられる契機となったのは、77年の改訂で、1年生と2年生の理科の目標に「身近に見られる生物を探したり世話をしたりして……生物に親しむ楽しさを味わわせる」からであるように思われるが、決定的なのは89年

の改訂で「生活」科が新設されたことであろう。「動物を飼ったり植物を育てたりして」が具体的な「内容」として列記され、この表現は、それ以後の指導要領の数度の改訂でも維持されてきた。

日本学術会議の科学教育研究連絡委員会・獣医学研究連絡委員会は、2003年6月に「学校における動物飼育に関する提言」を出し、教員養成課程で動物飼育教育のプログラムを設け、獣医師会と教育委員会が連携をとり、科学的な飼育や生命に関する教育の普及を図ることを求めている。04年には、獣医師を中心に、動物の飼育を介在とした教育を通して、健全な心の成長と科学的な視点を子どもたちに育むことを目的とした「全国学校飼育動物研究会」(会長・鳩貝太郎国立教育政策研究所名誉所員)が発足し、豊富な科学的知識と情報を掲載した研究会誌「動物飼育と教育」を発行するほか、研究大会を毎年度開催している。

「面倒見が面倒」ではあるが

ところが、ちょうどこの頃、04年の鳥インフルエンザ流行以後に、ニワトリやチャボ、さらには、小鳥などの餌やりや飼育小屋の掃除などの業務は、感染防止の観点から子どもたちの手から教職員に移った学校が多かった。飼育動物が死んだ場合の手続きも、勝手に処理することはできない面倒さもある。改正された「家畜伝染病予防法」によって、ニワトリやウサギの疾病や死亡については、近くの獣医師に連絡することが必要となった。

そして、夏休みなどの長期休業中の動物の世話

役は、児童から教職員になつていける学校が増えていく。忙しくなる一方の学校の職場で、飼育動物の世話をしていく余裕があるのかという疑問が出され、程なくして、鳥類だけでなくウサギやハムスターのような小動物もいなくなり、小屋そのものも取り壊される傾向が全国的に進んでいった。子どもたちの係活動として「生き物係」が消えつつある。学校飼育動物の減少と教職員の多忙化は、くしくも相関関係があり、小動物を養い、めぐる余裕のなさは、教職員のゆとりのなさとなつていっているように思える。

しかし、学校という場で、身近に動物と触れ合うチャンスは重要なものである。アニマルセラピー(動物介在療法)という、動物(特に哺乳類)との触れ合いが、人の健康の質を向上させることにつながるが指摘されて久しい。不登校傾向の子どもが、餌やりなどの動物の世話役となることで、生活リズムを安定させ、自尊心を高めていったという例は、幾つもある。

新型コロナウイルス感染症禍の中の学校で「三密」を避けるように万全の態勢をとり、子どもの下校後に消毒作業も加わる今の学校で、飼育動物どころではないことは明確だ。「今やろう」ということではない。コロナ禍の事態収束後の長い見通しの中で、動物飼育によるゆつたりとした時間の流れを学校に確保し「いのちの教育」の意義の確認をしようではないかということだ。ご存じだろうか、9月20日から26日までは「動物愛護週間」である。